

優生思想とどう向き合うか——相模原事件によせて

望田幸男

相模原事件への注目され方

ひとは、ある事象を批判する場合、根底にある思想的「質」をえぐり出し、次いでその具体的な異常ケースを引き合いにして、その事象を否定的に描き出すという手法を用いがちである。7月26日に起こった相模原事件を論評する場合にもそうだ。まず事件の思想的根底に優生思想があると断じ、次いでナチスによる安楽死やユダヤ人大量虐殺を、優生思想の「悪の極北」に見立て、そこから相模原事件の、ひいては優生思想の怖さに対して警鐘を打ち鳴らす。

ナチス政権による「安楽死」「大量虐殺」

ナチスは政権を掌握してほどなく1934年に、障害者の強制断種を命令した「遺伝病子孫防止法(断種法)」を制定し、それにもとづいて30万～40万人に断種・不妊手術を行った。さらに「安楽死」という名のもとに、障害者を「生きるに値しない命」として殺害した。「安楽死」の遂行は、「T4作戦」と呼ばれた。これは暗躍活動の本拠がベルリンのティーアガルテン通り4番地ににあったことから命名された。だが、この殺戮のうわさはたちまち流布し、1941年にはミュンスター大司教C.v.ガーレンによる勇敢な非難もあって、この計画は一時、中止に追い込まれた。

だがナチス政権は、この後も障害者にとどまらず、「社会的弱者」の迫害を推進した。すなわちナチス政権は、劣等人種とされたユダヤ人、さらにはジプシー(シンティ・ロマ)、スラブ系人種に対する大量虐殺に及んだ。その殺害総数は600万人といわれている(W.ラカー編『ホロコースト大事典』「安楽死」・「犠牲者数」、柏書房、2003年)。

ところで相模原事件はもちろん深刻な社会問題であるが、しかし、あくまで一地方の事件であり、ナチスによる大量虐殺のように、一党独裁下の国家による巨悪の所業と比較しうるものではない。しかし両者の根底に流れる社会思想的な意味においては、その同質性が感得されるがゆえに、その点でマスコミでも大きく取り上げられている。その同質性とは優生思想と呼ばれるものである(8月25日付朝日新聞朝刊「優生思想 連鎖する怖さ」)。だが他方で、相模原事件とナチスの所業とを二重写しで考え、相模原事件の深刻さを強調するきらいがないであろうか。それというのも優生思想や優生学を批判的に吟味する場合にも、いかなる意味でそうなのかという限定を加える必要を感じるからである。

優生思想とはなにか

優生学は19世紀末のイギリスなどでおこり、具体的には人間の遺伝的「劣化」の防止や改良によって、「優れた」人間を生み出そうと、「劣等」な人びとの出産を抑止する断種法として各国に広がった。その理論的背景には社会ダーウィン主義があり、ダーウィンの生存競争・自然淘汰の原理を人間社会に適用することをもって、人間社会の進化が期待された。その要点は以下のようなものである。

- (1) 人間は生来、不平等なもので、個人・民族・人種いずれのレベルでも、支配者たるべき存在と被支配者たる他はない存在という厳然たる違いがある。
- (2) 自然界とおなじように、人間の世界においても生存競争がある。
- (3) こうした闘争を通じてすぐれた側が発展し、劣った側が没落するのが「自然の法則」である。

こうした論理にもとづいて、「人間行動の決定的因子は遺伝的なるものだ」というテーゼが流布され、「社会的劣者」が断種の対象とされた。既述のようにナチス政権下では優生政策と人種主義の特異な結

合によって、猛威をふるうことになる。実は人種主義も優生思想の場合と同様に、歴史的背景としては19世紀ヨーロッパにおける自然科学の目覚ましい発展を背景にし、社会や人間を考える領域にも影響を広げていったのである。優生思想一般と人種主義は、優者と劣者の区別、劣者の蔑視という共通の思想に立ちつつも、人種主義が人種間に優劣を特定するという特質をもっている。

ナチス政権による600万人におよぶ大量虐殺は、優生思想とともに人種主義との特異な結合が背景にあった。こうして「ナチス＝優生思想＝悪の極北」という図式(『優生学と人間社会』講談社現代新書)が定立され、優生思想を、ナチ的なものに帰結する危険性という視点から論じる傾向が一般化したのである。

現代における優生学・優生思想との対峙

最後に二つの提言をしたい。第一は今日における優生学の動向との関係である。「21世紀は生命科学の時代である」、「遺伝学それ自体が悪ではない」という主張が登場している。そこではクローン操作、精子銀行、遺伝子診断サービスの商業化、代理母、出生前診断にもとづく選択的中絶、難病の根絶、人間福祉の観点からの遺伝病対策……等々が登場し呼号されている。こうした最先端の優生学の動向は、簡単に「優生学＝ナチス的なもの」という図式だけでは片づけられないし、対峙しえないものである。

第二に、「思想」それ自体と「現実」との間にはかなりの距離があるという問題である。ナチスの場合でも、「殺したい」という思い(幻想)と「殺す＝大量虐殺」という現実(行為)の間には、曲折に富み容易には超えられない「道程」があった。つまりヨーロッパ戦争のただなかで、人間集団をそこまで追い込んでいく社会心理の状況変化が不可欠であった。相模原事件が注目されるべきは、容疑者の思想がぞっとするような「怖さ」を感じさせるだけではない。こうした言動を受け入れ共感するような社会心理状況の広がりがあるからだ。今日、一方で経済的格差状況の深刻化、他方で格差の弊害をやわらげる社会保障的仕組みの解体化の進行によって、そうした社会心理状況が増幅されている。それは、相模原事件に関する反応にも現れている。たとえば「容疑者の気持ちはわかる。障害者に安楽死という目的は合理的だ」とか、「凶行の背景に過酷な労働とバランスを欠く低賃金がある」とか、「現在の差別は経済的合理性によって作り出されている」とかの反応が聞かされる。

現代における優生思想に対してはこうした二つの面におけるきめの細かい説明と対峙が求められている。

(ドイツ近現代史、同志社大学名誉教授、本誌編集委員)